



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03(3434)2233 発行人/永野博
Mail:info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2016年12月1日発行 第146号

目次	
P1 巻頭言	P8-10 国際理解講演会「バイリンガルの子ども達」
P2-6 UNESCO ユースフォーラム in みなと	P10 関東ブロックユネスコ活動研究会 in 東京
P7 みなと区民まつり	P11 アメリカ南部の家庭料理
P7 MUA サロン	P12 事務局便り / 編集後記

文化財はなぜ大切な？

副会長 宮下ゆかり



11月初旬、奈良の飛鳥路を訪ね、お寺や遺跡を見て回りました。青空の下、田んぼや畑の中を縫ってレンタサイクルのペダルを踏むのは爽快でした。

飛鳥路の魅力は、のんびりした田園風景と、謎に満ちた多くの遺

跡です。例えば「石舞台古墳」は、誰のお墓なのか？何故石室がむき出しなのか？何の用途に使われたのか分からない遺跡もあちこちにあります。

最も印象に残ったのは、高松塚古墳でした。壁に描かれた飛鳥美人たちは色鮮やかで、その服装は高句麗古墳のものと似ているそうです。四神は古代中国の思想に基づく一方、日本独自の画風も見られるとか。

当時のご先祖様たちは、中国大陸や朝鮮半島からの文化や技術に触れて驚き、尊敬し、模倣し、吸収しつつも、一方で徐々に自分流に代える努力もあったのでしょうか。盗掘があったにもかかわらず、これらの文化財が残されていたことは幸運でした。

壁画つながりで思い出すのは、アフガニスタンの

バーミヤン遺跡です。2001年3月、無残にも崩れ落ちるバーミヤン大仏の映像は世界に大きな衝撃を与えました。タリバーンが「偶像崇拜はイスラム法に反する」として大仏を破壊したのです。東西二つの大仏と共に、壁画も失われました。破壊した人たちにとって、約1,500年前に作られた文化遺産は何の意味もなかったのでしょうか？

日本でも昔、このような文化破壊行為がありました。明治元年に「神仏分離令」が出され、これによって各地で廃仏毀釈が行われたのです。

奈良の興福寺も大きな打撃を受けました。五重塔が25円（現在の価格で約10万円）で売られたという話も伝わります。買い手は装飾の金具が目当てで、木材は薪にするつもりだったが、解体費用が高いと知ると焼却処分しようとし、類焼を恐れた近隣住人の反対で、五重塔はかろうじて今日まで残されたのだそうです。

現在では、こんな無茶は出来ません。時代が変わったと言えばそれまでですが、なぜ文化財は大切なのでしょうか？なぜ私たちを惹きつけるのか？皆様と一緒に考えたいと思います。

UNESCO ユースフォーラム in みなと 2016

第6回 留学生との交流会 ～つながり始める僕らの New World～

日時 2016年10月1日(土) 午後1時～4時

会場 リーブラホール(みなとパーク芝浦 1階)

協力 いっくら国際文化交流会/宇都宮ユネスコ協会/宇都宮大学/作新学院大学/宇都宮共和大学
明治学院大学心理学部比較国際教育学ゼミ

共催 港区 使用語 日本語

インターネットや SNS の普及によって、世界中の情報が即座に手に入り、国を越えて人々と簡単に通信できる時代です。でも、だからこそ一層、直接に、人と人とが顔を合わせ、言葉を交わし、気持ちを通わせるナマの交流が大切ではないでしょうか。各国の優秀な留学生たちが日本各地で学んでいます。しかし、われわれが留学生の皆さんと交流したいと思っても、東京ではなかなか機会がありません。

ユース活動は 1981 年の創立以来多様な事業をしてきましたが、2002 年 3 月以来休眠状態が続き、「再びユース活動を！」という願いを持ちながら、だれも手を付けることが出来ずにいました。

2010 年、宇都宮市で留学生のお母さん役を続けておられる長門芳子さん(いっくら国際文化交流会会長、港ユネスコ協会理事)にご協力をお願いして、留学生達を東京にお呼びする形で、第1回「UNESCO ユースフォーラム in みなと」を開催しました。第1回から港区と宇都宮市の2地域コラボレーションの形をとりながら開催しています。

第6回目の今回は、宇都宮大学、作新学院大学、宇都宮共和大学の3大学から、8か国の留学生15名が参加して下さいました。大学から推薦された、日本語の上手な優秀な皆さんばかりです。お忙しい中、遠方から1日ばかりでイベントにご参加下さったことに、心からお礼申し上げます。



東京側の日本人は、明治学院大学、港区民、港ユネスコ協会会員、一般からの参加者でした。

あたたかい交流の輪が、国を越え、地域を越え、大学や組織を越え、年代を越えて、広がり、会場の方々に、笑い声や話し声の波が広がり、和やかな熱気に満ちたフォーラムとなりました。

第1部 13:10 留学生による、母国紹介(5分、6か国)(ABC順)

「日本語で、5分間に、自分の国を紹介する」という、難題に挑戦していただきました。短い時間内に、母国の何に焦点を絞り、いかに分かりやすく、母国をアピールするか工夫をこらした、それぞれのプレゼンテーションでした。お国や地域の特色が出た、また発表者の個性が滲みでた素晴らしい母国紹介でした。



紙面の関係で、テーマや筆者の印象に残ったことのみ書かせていただきます。

(1) 中国 by 徐麗明さん(作新学院大学)

結婚式にはそれぞれの文化が凝縮した形をとって表れ、今も生きている。存在する56民族の内、92%を占める漢民族の伝統的な結婚式、現在の結婚式を紹介。

(2) インドネシア by アリカさん(作新学院大学)

13,466の島から成り立つ国。島によって言語、文字、民族、衣装、食べ物、住まい、踊り、音楽、祭りなどが異なる。どの地域の文化にもそれぞれの歴史があり、特色がある。

(3) **モンゴル** by マヤさん (宇都宮大学)と、ムングさん (宇都宮大学)

遊牧民は牛、馬、羊等に美味しい草を食べさせるために移動し、厳しい気候に適した組み立式のゲルを生み出した。ゲルは5~6人で2~3時間で分解や、組み立ができ、総重量は250~300 kg。入口は必ず南側にある。

(4) **ネパール** by ラマさん (作新学院大学)

沢山あるお祭りの一つ「ティハール」は仏教とヒンズー教が混合したもので5日間続く。祭りの1日目：カラスの日、2日目：犬の日、3日目：吉祥天女 (お金の神様) の日、4日目：牛の日、5日目：兄弟姉妹の日。

(5) **タイ** by ディーンさん (宇都宮大学大学院)

合掌の形で行う挨拶はよく知られている。礼儀作法の多くは国法で規定されている。一番暑い時期に行われる水かけ祭り、多くの川で行われる灯ろう流しは日本でも有名。

(6) **ベトナム** by マイさん (作新学院大学)

人口9,250万人の多民族国家、6割が25歳以下。平和、自由を重んじている。観光資源にも恵まれ、目覚ましい発展を続けている。

第2部 13:50 3グループに分かれてのトーク・タイム



椅子の並べ替えを行って、参加者全員が、3グループに分かれ、丸く輪になって椅子に座る。

留学生15名は3チームに分かれ、15分ごとに、3の輪を順に巡る。



各グループは、リーダーの進行によって、全員で、留学生を中心に話し合いを行う。

テーマは、①日本に来て感じた“自分の変化” ②母国とのギャップ ③留学生が思い描く将来の夢 など。



第3部 14:50 全員参加のゲーム

この第3部の企画と司会は、モンゴルのムンジュさんと、モンゴルのマヤさんが引き受けて下さいました。



最初に、舞台上で、モンゴルのムンジュさんとマヤさんが民族舞踊 (女性の1日) を披露して下さいました。

その後、全員が一つの大きな輪になって座り、椅子取りゲーム、ゼスチャー対抗ゲーム、ジャンケンゲーム、番号まわしゲームを楽しみました。



誰もが簡単にできる、身体を使う単純なゲームばかりですが、全員が一緒になって、国も、年代も意識することなく、子供時代に戻ったような、明るい笑い声が響きわたる時間でした。「近頃で、こんなに笑ったことがなかった。」「本当に楽しかった。」となどという声が聞こえました。

閉会 16:00

皆さまのご協力によって、楽しい時間を共有させていただくことができました。心に熱く響く、意義深い午後を過ごしていただけたと肌で感じました。主催者として、感謝と感激で一杯になりました。



留学生の皆さん、
これからも、実り多い、楽しい日本での生活を送られますように、そして、幸せな充実した人生を歩まれるように心からお祈りいたします。

まとめ：相談役・理事 高井光子
写真：明治学院大学中西裕介さん

後日、宇都宮の留学生たち、明治学院大学、ベトナム放送東京支局長に、感想文を書いていただきました。下記に、ご紹介します。

宇都宮大学留学生 6名

スリランカ民主社会主義共和国：ササンカさん (Mr.)

2016年3月大学院工学部情報システム科修士卒業、4月半導体テスト装置メーカー入社

大学院留学中の2013年から4回連続して参加している。3年前からは、チラシ作成も任せてもらい、連絡のやり取りを通して、大学の授業では経験出来ない、社会人になった時に役立つ実務的なことについて学ぶことが出来た。また、就職活動の時の面接で「勉強以外の社会活動の経験をした」とアピール出来た。

自分の国を紹介したり、知らない国々の話を聞いたりして、自分の世界が広がった。大学では学べない貴重な経験だ。ここで得た経験が、新入社員として、今、仕事の上で役に立っている。このイベントへの参加を皆さんにお勧めしたい。来年も再来年も応援し続けたい。



モンゴル国：ムンジュさん (Ms.)

大学院工学研究科修士1年

2回目の参加となりました。去年と比べ留学生数が多く、中国、ネパール、韓国など、8か国14人の留学生が参加している、とても国際的な場になりました。自分たち留学生が日本に来て学んだことを話しながら、お互い国の理解が深まり、世界が小さく感じました。

今回、第3部の司会や企画を担当させていただきました。私たちが考えたゲームで、会場全体で楽しく遊ぶことができ、一生忘れない時間を過ごせました。最後に、留学生たちを代表として、この素晴らしい経験を私たちに与えて下さった関係者の皆様に感謝申し上げます。

モンゴル国：マヤさん (Ms.)

工学部建築学科2年

今年も参加し、東京の皆さんとお会い出来て嬉しかったです。去年に比べ日本人大学生の参加が少なかったが、大人の日本人参加者と温かい空間の中で、楽しいひと時過ごしました。中国、インドネシア、タイ、ネパール、ベトナムについての発表を聞いて知識が深まり、何より、多くの方々との交流は貴重な体験でした。皆それぞれ違う志を持ち、そのために頑張っている様子が刺激になりました。日本人学生達の志もお聞きしたい

のは勿論、来年もまた交流できたらと思います。今年のフォーラムは皆さんの温かい気持ちと一人一人の力で思い出に残るフォーラムになりました。留学中に日本人の素晴らしい姿勢を見習いながら成長したいです。

モンゴル国 : ムンゲンザヤさん (Ms.)

農学部3年モンゴル国立農業大学からの交換留学生

私は、昨年10月宇都宮大学と姉妹校のモンゴル国立農業大学から、交換留学生として宇都宮大農学部に留学、10月6日帰国しました。帰国直前の10月1日、ユースフォーラムに新幹線に乗って参加出来て、決して忘れない貴重な思い出となり、嬉しかったです。関係者の皆さんに心より感謝します。来年4月、大学院に再留学したいので、モンゴル農業大学4年の1年間頑張って、来年日本の大学院に再留学したいです。

タイ王国 : ディーンさん (Ms.)

大学院国際学研究科修士1年 吉田一彦教授研究室

初めて参加しました。様々な国の留学生が、自分の国を紹介したり、モンゴルの伝統的なダンスを見たり、最後にみんなでゲームしたり、楽しかったです。その中に日本人と他の国の留学生達とディスカッションがあり、自分が知らなかった知識や考えなども聞け、本当に勉強になりました。機会があれば、またこのようないいイベントに参加したいと思います。

ベトナム社会主義共和国 : リンさん (Ms.)

大学院国際学研究科修士1年 吉田一彦教授研究室

参加させていただき、ありがとうございました。初めて、自分の国を皆さんに紹介するチャンスを頂いて、とても楽しみにしていました。でも、少し心配がありました。皆さんは私の国について、興味を持っているのかを心配していました。実際に皆さんがベトナムの紹介も他の国の紹介にもすごく興味を持って聞いていただいたので、本当に感動しました。他の留学生と交流でき、他の国の文化などについてたくさん学びました。私にとって、今回のユースフォーラムは、とても良いチャンスでした。ありがとうございました。

作新学院大学留学生 4名

中華人民共和国 : 徐麗明さん (Ms.)

大学院経営学研究科博士前期課程修了

今回、初めて参加し、他の国の留学生達の母国紹介を聞き、「世界には、まだこんなに面白い文化あるのだ」と感じ、自分の視野が広がったと思います。また、留学生の皆さんや、親切にしてくれた日本の方と交流したり、ゲームしたりして、楽しく有意義な1日を過ごしました。この素晴らしいイベントに参加させていただき、心から感謝いたします。

ネパール連邦民主共和国 : ラマさん (Mr.)

経営学部経営学部3年

今回、参加でき、とてもうれしいです。このフォーラムで、様々な国の人々と交流すること、また、その国の文化について学ぶことができました。その上、自分の国の文化について発表することもできました。そして、世界の色々なゲームを知ることができました。このようなプログラムはとても有意義で大切だと思います。たくさんの人々との交流が楽しかっただけでなく、みんなの前に立って発表するという自分にとって、将来に役立つ経験ができました。最後に、今後のイベントにはアジアの人々だけではなく米国やヨーロッパなどの人々の参加があればもっと良いかなと思います。

インドネシア共和国 : アリカさん (Ms.)

経営学部経営学部3年

初めて参加しました。他の国の紹介を見て、面白い事がたくさんありました。自分の母国と他の国はそんなに文化が違うかと思いました。世界の中に素晴らしい文化がまだまだたくさんあります。また、留学生達に親切にしてくれた日本の方々と交流したり、ゲームをしたり、楽しく1日を過ごしました。いい思い出ができて、いい経験をしました。この素晴らしいイベントに参加させていただき、本当に嬉しいです。素晴らしい経験をして、感動しました。感謝しています。

ベトナム社会主義共和国 : マイさん (Ms.)

人間文化学部2年

初めて参加し、楽しかったです。自分として今回参加できたことは良い経験になりました。自分の国の文化を日本人や他国の留学生の皆様を紹介し、また、色々な国の文化の紹介を見ることができました。世界の中の色々な国にある色々な面白い文化を体験することもできました。日本人の皆様と一緒に会話し、またゲームでも大笑いしました。私達はお互いに心を開けることもでき、本当に有意義な1日を過ごしました。今回のイベントはとても留学生のためになるもので、参加させて頂きご本当に感謝いたします。

宇都宮共和大学

大韓民国：辛 浩源（シン・ホワン）さん（Mr.）

シティライフ学部2年

港区で開催された UNESCO コース・フォーラムに参加しました。今回は宇都宮共和大学も参加させてもらうことになり、3人で行くことになりました。日本に来て初めての経験で、緊張もしました。何も準備できず行きましたが、皆さん優しくしてくれて本当に嬉しく思います。そして、色々な国と文化を知って、いい人たちに出会ってとても良かったと思います。

大韓民国：姜 玟碩（カン・ミンソク）さん（Mr.）

シティライフ学部2年

交流会に参加しました。朝早かったし、疲れてやる気がなかったけれど、行ってみるといろいろな人と出会い、いろいろな国の友達もでき、人によって世界観も違うのだなあと感じました。ただの交流会だと思っていたけれど、一緒にゲームをして、今では私が外国人じゃなく、みんなと一緒に人間だと思えるほど、やりがいがありました。

中華人民共和国：胡 津童（コ・シンドウ）さん（Mr.）

シティライフ学部4年

今回初めてこの留学生交流会に参加し、様々なバックグラウンドを持っている外国人および日本人と交流ができ、楽しかったです。中国人、韓国人、ベトナム人、モンゴル人など、外国人たちはすごく優しくかったです。みんなは母国紹介とゲームを遊び、いろいろな文化を教えてくださいました。本当に楽しかったです。ありがとうございました。

ベトナム国営放送局 東京支局 支局長

ブイ フィン フンさん（Mr.）

（2001年度外務省招聘研修生）

参加したのは初めてですが、深い印象が今も心に残っています。留学生たちは、母国の文化の秘めた美しさと、日本で体験した日本のことについて発表しましたが、本当に素晴らしかったです。国際交流活動を通じて、人々はお互いに理解し、友達が出来ます。異文化についても理解でき、それぞれの貴重な財産になります。「第6回」の成功の中に、長年企画・準備された関係者の貢献があります。参加した留学生たちにとって、将来、日本留学の貴重な財産になるでしょう。

明治学院大学

心理学部 教授 渋谷 恵 先生（Ms.） 比較国際教育学ゼミ

留学生の皆さんの活躍により、発見と笑いにあふれる時間を過ごさせていただきました。こうした共有体験の積み重ねが、相互理解の基礎となることと思います。すでに留学を終えた方が再び参加されるなど、港ユネスコ協会の長年にわたる活動と、その意義を感じることもできました。貴重な場に参加させていただき、ありがとうございました。

中西 裕介さん（Mr.）

心理学部比較国際教育学ゼミ4年

様々な留学生たちと交流ができて本当に素敵な時間でした。留学生の方々が熱心に日本という慣れない土地で勉強なさっているということを感じて、すごく熱くなるものがありました。今回、日本人学生は自分だけだったので、自分の経験や、体験でしか語れませんでした。今後さらに日本人学生も参加していけたらと思います。

皆さま、ご協力有難うございました。

感性と知性に満ちた文章を読ませていただき嬉しく思っています。

（長門芳子、高井光子）



第35回 みなと区民まつり・参加

日時 2016年10月8日(土) 11:00~17:00 ・ 9日(日) 10:00~16:00

場所 港区立芝公園 テントの位置「みんなの広場」第5ブロック 34番

あいにく、2日とも午前中雨になりました。でも、来場者数は例年とあまり変わらないようでした。今年は公園内の一部が改修され、テントの位置が変りました。新しい場所での人の流れを心配していましたが、御成門口から芸能ステージに向かう通りに面している人通りが多く、以前は少なかった男性や高齢者の方々も立ち寄ってくれました。



9日には、武井区長が各テントを回られ、港ユネスコ協会のテントにもお越しいただき、励ましをいただきました。

各委員会の事業の展示パネルの前で、今後に予定している催しのチラシを配りました。パネルやチラシを見て、質問される方には、協会の説明をしたり、入会の声かけをしました。

「ミニ・バザー」は、会員の方々の協力のおかげで、昨年並みの売上がありました。経費を差し引いて、「東日本大震災子ども支援募金」に寄付いたします。荷物運搬に車をご用意いただいた永野会長、品物の提供、当日の準備、片付けに協力下さった皆様、有難うございました。

みなと区民まつり委員会副委員長 常任理事磯部豊子



第20回 MUAサロン

日時 2016年11月8日(火) 18:00~20:00

場所 港区立生涯学習センター内 港ユネスコ協会事務局

話者 友金守 理事

～国民学校入学(1943年)から、今日のMUA活動に至るまで～

故郷(丹波)の恩師に敬愛と感謝をこめて

今回の話者・友金守理事が、故郷の京都府の丹波の片田舎で生まれ育った時代の様子から、今日に至るまでの半生を、当時の写真、恩師と交わした手紙など数々の資料を示しながら、「人との縁の有難さ」を2時間にわたって熱っぽく語られた。

多くの恩師から支援を授かったおかげで、戦後の大学進学が難しい時代に、大阪外国語大学(現・大阪大学外国語学部)へ進学できたことに感謝を込めて話された。

社会人として就職したのは NEC。この時代に経験した一つの例として、アラブ出張時のエピソードを披露された。国、民族、宗教などが違っても、真心で接することで生まれた友情、信頼関係の大切さを強調された。



また、趣味の絵画・仏像鑑賞、写真なども現物を見せながら、深い思い入れを述べられた。

会社を定年退職後、縁あって港ユネスコ協会の事務局を手伝うことになり、当時の三輪公忠会長の計らいで都合6年間、事務局長を務められた。在職時には、会費収入を増やすために、家族、親族、恩師、学友、会社関係などに粘り強く協力を呼びかけた。それまでの人間関係が役立って、大勢の賛助会員、法人会員を獲得できたことを、会計報告リストを見せながら当時の奮闘ぶりを証明された。

いずれの体験談も私心なく真心で人と接すれば必ず助けてもらえるという信念に貫かれたお話だった。

最後に、出席者全員で「故郷」を合唱し、終了した。

会員 塩瀬 正明

2016年度第2回 国際理解講演会

日時：2016年10月14日（金） 午後6時30分～8時30分

会場：港区立生涯学習センター3階 305号室

バイリンガルの子ども達 ～グローバル社会の未来を担う子どもを育む～

講師：オパール・ダン 氏（英国人） 幼児教育の専門家

通訳：青柳 洋子氏



講師プロフィール

1971年から9年、外交官のご主人と日本滞在。80年に英国に帰国。

77年に帰国子女のための英語文庫「だんだん文庫」、79年に文庫開設を支援する国際児童文庫協会を創設。2008年に日本人子女の国際化教育に寄与した功績により旭日双光章受賞。今回は講師の英語による講演会のため、ICBAのご紹介で日本語の通訳をお願いした。

【講演内容】

国際結婚

「だんだん文庫」を創設して来年で40周年を迎えるが、この間に英国を含む世界は大きく変化した。若者は国境を超えて勉強し、働き、国際結婚も増加している。生まれる子どもは二つ以上の文化を理解し、二つ以上の言葉を話す。二つ以上の言語を話すことにより思考が広がり、異なる考え方や文化への理解が深まる。このような子ども達はどの社会においても宝である。

英国にはヨーロッパから多くの人々が働きにきていて、カフェでは4～5か国の言葉が交わされている。しかし英国人の多くは英語だけを話し、学校ではバイリンガルの教師が不足している。

英国に住んでいる日本人との国際結婚のカップルの子どもたちは、学校や社会で英語を使うことが多くなり、日本語は弱い言語となっていく。文庫では言葉だけでなく文化、そしてアイデンティティを構築できるようにサポートしている。

「ダブル」

国際結婚の子どもは一般的にハーフというあまりよくないトーンで使われる言葉で呼ばれている。ミセス・ダンはかつて「バイリンガル」という言葉を使っていたが、ある日、6歳の子どもが「私は日本と英国のハーフよ」といい、自分の身体の半分を指して「私のどちらが日本でどちらが英国？」と心配そうに聞く姿に考えさせられ、その子に「あなたはハーフでなくダブルよ。だって二つの言語と二つの文化を持っているでしょう」と言った。すると子供はすぐにその理屈を理解し「私はダブルよ」と母親に誇らしげに言った。

それ以降、ミセス・ダンもダブルという言葉を使うようになった。大人は子どもたちの言うことに耳を傾けることが大切である。バイリンガルは大人が使う言葉であり、子どもにはその意味はわからない。子どもには自分が理解できる言葉が必要である。

ダブルの子ども達の問題

国際結婚の数を把握するのは難しく、統計もない。国際結婚の家庭はいろいろある。例えば、男性が文科省のジェットプログラムで日本に来て英語の教師をしている時に日本人と結婚するケースでは、父親が日本語を話し、文化も理解しているので問題は比較的少ない。

最近、日本人女性が若い頃留学し、日本で暫く仕事に就いたのち、再び留学先に戻り、28歳～31歳位で国際結婚するケースが増えている。日本の女性がヨーロッパの男性と知り合い結婚する時には、どこに住むか、学校はどこにするかは考慮するが、お互いの言語については話さないことが多い。子どもが出来たときに初めて、子どもと日本語でのコミュニケーションをとるのが難しいことに気づく。

英語圏以外からの父と母の家庭内の話し合いが broken English となることも多く、問題である。母親も次第に疲れ、家庭内での日本語による日本の話題も乏しくなるケースもある。しかし現在は、テクノロジーの進歩により、



スカイプを使って日本にいる祖母から日本語や日本の文化を学ぶことができるし、学校の休暇を利用して、日本の祖母のもとに行き、日本に触れる機会もあるので利用すると良い。

「だんだん文庫」の開設

夫の日本赴任後、1977年に目黒の東山に、「だんだん文庫」を開設した。英語圏で育ち、流暢に英語を話す帰国子女の英語力と異文化に対する理解を、どうすればさらに育てていくことができるかというところからスタートした。文庫は、絵本を読み、早口言葉や歌・ジョークを通して楽しく学び、他の子ども達と出会う場である。一歩足を踏み入れると英語を話せる場であった。

「だんだん文庫」で子どもたちをサポートしたのは、ネイティブ・スピーカーであり、かつて外国に暮らした母親たちである。彼らは、それぞれのスキルを惜しみなく子ども達のために使った。

文庫の変遷

1980年代、日本には帰国子女が多く通う独語・仏語・英語の文庫が50あった。1983年に英国に帰国後、ミセス・ダンが英国に日本語文庫を開設した。当時、英国に在住する日本人の両親を持つ子どもが大勢いた。彼らは現地の学校に通い、英語の授業を受け、日本語を話さなくなっていた。現在の日本語文庫は、国際結婚の子ども達が多くをしめ、その数は16か国64文庫に広がっている。英国では文庫が地方にも広がり、文庫数は36になり、594名の子ども達が参加している。文庫は、社会の変化にともなうニーズに柔軟に应变ながら、少しずつ形を変えてきた。しかし、いずれの文庫も、子どもたちが成長する中で、大人が子ども達の言葉を聞き、また子ども達に語りかける余裕のある打ち解けた環境を提供することを大切にしてきた。

英国の文庫

1983年に設立。当初、文庫に通う子どもの両親はほとんどが日本人であった。今の文庫は、母親が日本人で父親が外国人のカップルの子どもが多い。コミュニティの雰囲気大切に、子どもが文庫に属し、自分の居場所があると思えるような環境をつくっている。子ども一人ひとりの話に耳を傾け、毎回子ども全員と話すように、母親にお願いしている。日本語が話せなくとも父親にも参加してもらえるように、文科省の冊子を手渡し、日本文化にも関心を持ってもらうようにしている。

男の子は現地の学校で余りハッピーでないことも多いが、成績が良いので見過ごされているケースもある。文庫では終了前の10分、子ども達は自由に遊ぶことで発散し、仲間との絆もつくる。文庫では皆ダブルの子どもなのでリラックスしている。補習授業校に通うようになると、英国ではきちんと座って授業を受ける習慣がないので、子ども達にはフラストレーションが生ずる。この移行期をスムーズにできるよう、日本での社会での振る舞い方や、丁寧な言葉づかいを心がけている。

オーストラリアで文庫を主宰している児童文学者の渡辺茂男氏の長男である渡辺鉄太さんは、この夏、国際図書評議会のニュージーランド大会において、文庫とは何かを発表するポスター・セッションをおこなったところ、大きな反響があった。文庫は日本からの素晴らしい文化の輸出である。

子どもの成長

人の生涯にわたる姿勢や態度は6歳～7歳に形成され、それを変えることはとても難しいということはよく知られている。このことは、紀元前3世紀にアリストテレス、そして20世紀には鈴木メソッドの鈴木博士も気がついてきた。マリア・モンテソーリは、子どもの脳は五感を使ってスポンジのようにすべてを吸収するので、子どもが自分のペースで言葉を吸収し、自分のやり方で学べるように、大人は機会を与え、手助けをする必要があると言っている。また、子どもは正か悪か判断せずに吸収するので、現在のタブレットゲームで使われる不快な言葉が今後の子どもにどう影響するか心配である。



神経学者の研究は、脳の働きの面では解明されてきたが、心の発達はまだ分かっていないことが多い。意識の脳は4歳から芽生え、批判思考が出来るのは6歳からである。この批判思考を子ども達は経験を通して学ばなければならない。文庫では、2通りの選択肢を提示して1つを選ぶというようにして子ども達が学ぶ工夫をしている。

【質疑応答】

Q1 : 認可外の2歳～3歳のナーサリーで母国語が英語でない親（アジアやアラブ系）から日本語を教育してほしいと要望がある。絵本を与えるには？

A : 伝統的なものを紹介する。世界中で読まれているシンデレラのような本や、紙芝居で昔ばなし等、シンプルな言葉のものがよい。親の教育レベルを知ることも大切である。

Q2 : 日本在住のブラジル人です。日本に子どもがいるが、言葉の壁をどうしたらよいか？

A: ICBA の丸山さんに相談するとよい。教会でポルトガル語を話せる人達とコミュニティをつくり、文庫活動をはじめのもひとつ。

Q3: ダブルの子どもとして育ったが、英語が主で、日本文化を知るのが困難である。

A: どの人もユニークである。20代になって二つの文化の内1つを知らずに悲しく思っている人が多くいる。全ての子どもに2つの文化の基礎を与える必要がある。文庫では、夏休みに子ども達が日本の祖父母と過ごし、コミュニケーションをとることを勧めている。二つの文化を知るチャンスを与えることを文庫で行っている。

Q4: デジタルブックに関して？

A: 本の良さはページをめくる時のときめき、本の紙の匂いなどである。絵本を読む時の感覚が大切だと思う。

ミセス・ダン は年齢を感じさせないパワーで、情熱的に子どもたちのことを講演された。文庫と学校の相違点を大事にされ、子どもへの愛情深さが伝わった素晴らしい講演に感謝申し上げたい。有難うございました。

国際学術文化委員会 副会長 奥村和子

【追記】 講演内容は港区の動画として配信されます。詳細は、港区のホームページ「生涯学習講座」をご覧ください。また、港区トピックスの中でケーブルテレビ及び、ちいバスで放映・紹介されます。

2016年度 関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 東京

Together for Tomorrow 今日の世界を考え、明日の平和を語り合おう

日時 2016年9月3日(土)・4日(日)

会場 青山学院大学 ガウチャー記念礼拝堂・17号館

主催 公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟、関東ブロック・ユネスコ連絡協議会・東京都ユネスコ連絡協議会

関東圏の6ユネスコ連絡協議会が持ち回りで開催している。今年は東京都ユネスコ連絡協議会が担当。渋谷区の青山学院大学を会場にして、400名を超える会員、ビジターを迎えて盛大に開催された。



メイン会場の礼拝堂の入口には、予め募集していた「ユネスコ川柳」が掲示された。目黒区のジュニア・コーラスグループ「コスモス」の合唱、そして礼拝堂が誇るパイプオルガン演奏でお迎えした。

基調講演は、脳科学者・茂木健一郎氏による「他者と関わるネットワークを通じた創造への道」。今日の人間関係を説き、ユネスコ活動の意義を説かれた。

今年は、「ユネスコ青年活動研究会」と題して、次世代を担う青年たちの発表の場を特に設け、参加者の若返りと、交流が図られた。分科会は、第1から第5に分かれ、「ユネスコスクールとESDパスポート」「青少年問題と次世代育成」「世界遺産・未来遺産」「戦争と平和について考える」「世界寺子屋運動と国際交流・支援」で構成された。いずれの分科会においても、研究発表と活発な討議、質問が繰り広げられた。

港ユネスコ協会からは、9名、ビジター1名が参加。永野博会長が分科会「戦争と平和について考える」で司会・進行を担当された。6時半からの交流会は、構内にある「アイビーホール」で開催された。

二日目は、代表者会議と、日ユ協連主催で「実務担当者会議」をゲーム形式で「ユネスコの基礎知識」を学ぶ和気あいあいの研修となった。二日間が無事に終了。来年は、千葉県を担当となる。

実行委員たちは昨夏から準備を始めた。各地域の委員との共同作業によってひとつの大会を完成させた喜びはひとしおであった。

実行委員：常任理事小林敬幸、国際学術文化委員長佐藤律子



アメリカ南部の家庭料理

日時 2016年11月6日(日) 12時~15時30分

会場 港区立男女平等参画センター「リーブラ」料理室

講師 ラトーニャ・ウイティカさん

フードコンサルタント、レストラン『Soul Food House』総料理長

講師紹介



アメリカ合衆国ミシシッピ州生まれ。日本に滞在して15年。語学学校講師を経て、アメリカ南部料理店のコック長に。日本に来た当初、食べ物の違いからホームシックになったが、たまたま来日された母上が、食材を近所から調達して、懐かしい家庭料理を作ってくれた。この時、「日本にいても懐かしい味をつくるのは可能なのだ」と知り、それ以来、料理を続けている。美声の持ち主でゴスペルの歌手でもある。

アメリカ南部の料理

ケイジャン料理、クレオール料理などが有名。アフリカ、フランス、イングランド、スコットランド、アイルランド、ドイツさらにネイティブアメリカンの影響を受けている。合衆国南部の歴史を包括した料理、味である。

当日のメニュー

①シュリンプフォンデュ・ガーリックトースト添え (Blackened Shrimp & Spinach Fondue)

ブラッケンシーズニングで味つけした小エビ、バター炒めした玉ねぎ、ホウレンソウと共にワイン、生クリームと小麦粉で作ったホワイトソースに混ぜる。アメリカ産モンテレージヤック・チーズをトッピングしてオーブンで焼く。



②ブラッケンチキンとマクシュ (Blackened Chicken with Maquechoux)

チキン肉をオリーブオイル、醤油、ガーリックペーストにつけておく。ガーリック、パプリカ、カイエンヌ、オレガノ、タイム、塩コショウ(ブラッケンシーズニング)をまぶして焼く。マクシュはコーン、ピーマン、トマトをケージュン・シーズニングで炒める。



③ブレッドプディング・ブルボンソース添え (Bread Pudding with Bourbon Sauce)

フランスパンを適当な大きさにちぎり、ミルク、卵、砂糖、ヴァニラエッセンス、レーズン、シナモン、ナツメグを混ぜたものにつけておく。オーブンで焼く。ブルボンソースは、黄身、砂糖、バーボンウイスキーを混ぜて作る。



調理実習

ラトーニャさんが日本で故郷アメリカ南部の家庭料理をするに至った話の後、料理を開始。

まずは材料の吟味から始まった。スパイス、シーズニングはすべてご自分で調合。ここで使ったブラッケンシーズニングはラトーニャさんの味。出来合いでない家庭料理の味のもとである。醤油はよく使われるとのこと。



いつものようにあわただしい実習だが、とにかく早く試食したいという一心で、皆一生懸命に取り組む。幸いに時間内に出来上がり、試食を楽しんだ。

その後はラトーニャさんの美しい歌声。参加者も加わってゴスペル・フリーダムの合唱になり、全員でアメリカ南部の雰囲気を感じた。

調理室の隣の部屋で会合をしていた外国の少年少女達もいつのまにか料理室に来て聞き入っていた。

料理そして音楽には国境はないと確信した一日であった。

訃報

松岡 寛先生が2016年10月、92歳で亡くなりました。謹んでお知らせさせていただきます。
港区立青山中学校校長を退職されると同時に1984年度から港区教育委員会の社会教育指導員として、その後は職員として、事務局の基盤を整えて下さいました。中でも忘れられないのは、休みの日にご自宅でテーブル起こしをされて、7つの講演の記録集「語りかけ 学びつつ 平和を創る」(1985年発行)を編集して下さいました。最近までお元気で油絵の個展を開いておられました。ご冥福をお祈りいたします。(高井光子)

事務局便り

【今後の行事予定】 (詳細は別途、チラシやホームページでご案内します)

- ☆12月14日(水) 18:30~20:30 国際理解講演会「アフガニスタンの世界遺産 パーミヤンの昔と今」
講師：前田耕作氏 アフガニスタン文化研究所所長 会場：港区立生涯学習センター
- ☆1月11日~4月5日 初級英会話講座、毎水曜日、18:30~20:30 コース全12回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター
- ☆1月11日~3月29日 初中級英語講座、毎水曜日、18:30~20:30 コース全12回
講師：笠原三郎先生 会場：港区立生涯学習センター
- ☆1月11日(水) 12:00~14:30 MUA 新年会員懇親会 会場：NEC 芝倶楽部
- ☆1月27日(金) 18:30~20:30 シンポジウム「国際都市と感染症」 参加費：無料
パネリスト：岩本愛吉氏 東京大学名誉教授
中嶋建介氏 AMED 戦略推進部上席調査役
沢辺京子氏 国立感染症研究所昆虫医科学部部長
コーディネーター：永野博 港ユネスコ協会会長
会場：港区立男女平等参画センター・リーブラホール (みなとパーク芝浦1階)
- ☆3月1日(水) 15:00~16:30 ディプロマツツ・レクチャー (対象：駐日大使および大使館員のみ)
講師：嘉治美佐子氏 (公財)世界平和研究所 シニア・リサーチ・フェロー



【ご寄付、ご寄贈品など。ご協力ありがとうございました。】(敬称略)

☆日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金 区民まつりバザー売り上げから：¥17,698 日ユ協連へ。

☆ミンダナオ子ども図書館 衣料品等のご寄贈：菊地賢介・鈴木明美

【ご協力をお願い】 常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。

*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

*ミンダナオ子ども図書館へ 寄贈品 衣料品(除毛織物) 新品・中古品(洗濯済) 寄付金(送料分)

港ユネスコ協会事務局 (火~金 10:30~17:30)

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

—編集後記—

◆ 初めて Bulletin のお手伝いをさせていただいた。いろいろな活動を通して、様々な国や地域の方たちとの交流をしている報告を読んで、これが広がれば、世界が平和になるのになあ〜と改めて思った。来年は、地球上から一つでも多くの争いがなくなり、Happy な世界になりますように。(小林真弓)

◆ 私事で恐縮だが、次女が9月中旬に子供を産んだ。長女の下の子が5歳になるので5年ぶりの赤ん坊である。こちらの都合を赤ん坊に押し付ける訳にはいかないので、何をすることも先方のご機嫌次第である。人は赤ん坊を抱いているだけで優しくなれること、同時に我慢することを学ぶ機会をまた与えられたと感謝する毎日でもある。(須田康司)

◆ 今年春先に封切りとなったが見逃していた米国映画を、つい最近観ることができた。アカデミー作品賞「スポットライト：世紀のスクープ」がそれで、ボストン・グローブ紙の記者チームが不転の覚悟をもって、巨大なカトリック教会組織によるスキャンダル隠蔽に挑み、事実を白日の下に晒す戦いぶりにプロ魂を感じた。(棚橋征一)

◆ ロゴや競技場問題などで躓きながらも、東京5輪・パラリンピック2020が動き出した。4年後へ向けて機運を盛り上げる役割を担っている若いアスリートたちの活躍に、希望と元気をもらっている。不安定要素の多い世界の中。スポーツに心を奪われているうちに、あらぬ方向へ向かっていかないように願っている。(高井光子)